

令和4年度

埋蔵文化財年報

2023

公益財団法人富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 課

序

当財団は令和4年度に富山県からの委託をうけ、3件の埋蔵文化財の発掘調査事業と1件の遺物整理事業を行いました。

主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連では、富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡の調査を実施し、弥生時代後期の方形周溝墓3基が確認されました。富山湾海浜部での弥生時代の様相を知る上での貴重な調査事例となりました。

県営農地整備事業関連では上条中部地区で富山市水橋田伏遺跡、小長沢地区で富山市小長沢Ⅱ遺跡・下邑遺跡の調査を実施しました。水橋田伏遺跡では墨書土器が出土する平安時代の溝が確認され、集落の縁辺部を把握することができました。小長沢Ⅱ遺跡と下邑遺跡では中世以降の溝や河跡が確認され、付近に集落が展開していたことが予想されます。

主要地方道高岡小杉線道路改良事業関連では、令和2年度に発掘調査しました射水市南太閤山Ⅰ遺跡の遺物整理を実施し、報告書を刊行しました。土壌洗浄により得られたオニグルミを中心とした多様な種実を丹念に調査することにより、当時の植物利用の一端を明らかにすることができました。

本書は、令和4年度に当財団が実施した事業の概要をとりまとめたものです。本書をとおして埋蔵文化財への理解がより深まれば幸いです。

事業の実施にあたりご協力賜りました関係各位に深く感謝申しあげるとともに、今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年6月

公益財団法人富山県文化振興財団

埋蔵文化財調査課

目 次

I 公益財団法人富山県文化振興財団概要

1 名 称	1	2 所在地	1
3 目 的	1	4 事 業	1
5 沿 革	1	6 組 織	1

II 埋蔵文化財調査課概要

1 名 称	2	2 所在地	2
3 施設概要	2	4 組 織	2
5 職 員	2		

III 事業概要

1 発掘調査事業	2	2 遺物整理事業	2
3 刊行物	2	4 受贈図書	3
5 普及事業	3		

IV 主な会議・研修

主な会議・研修	3
---------	---

V 調査概要

1 令和4年度発掘調査	4
2 主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連遺跡発掘調査	4
3 県営農地整備事業関連遺跡発掘調査	9

VI 研究レポート

縄文時代前期の古植生	18
------------	----

I 公益財団法人富山県文化振興財団概要

- 1 名 称 公益財団法人富山県文化振興財団
- 2 所 在 地 本部：富山市新総曲輪4番地18号（富山県民会館内）
- 3 目 的 富山県民が多彩な芸術文化に親しむ機会を充実するとともに、次世代を担う子どもたち・青少年の健全な育成と生涯学習・学術調査に係る事業を通じてふるさと富山の文化や歴史を学ぶ機会を提供し、もって県民一人ひとりが身近な芸術文化活動や学習活動に参加するとともに、世界に誇ることのできる芸術文化の創造・発信に与することを目的とする。
- 4 事 業
 - （1）文化施設の貸与、芸術文化事業の展開及び美術館・博物館施設の運営等を通じた芸術文化の推進
 - （2）生涯学習機関における講座の開設、学習相談、学習資料の収集及び表彰事業等を通じた県民の心身の健全な発展、豊かな人間性の涵養
 - （3）埋蔵文化財の調査、資料収集等を通じた学術の振興
 - （4）その他この法人の目的を達成するために必要な事業
- 5 沿 革

昭和55年8月1日 財団法人富山県民会館と財団法人教育文化会館を統合して「財団法人富山県文化振興財団」を設立

平成元年4月1日 富山県民会館に埋蔵文化財課を新設し、埋蔵文化財調査研究事業を開始

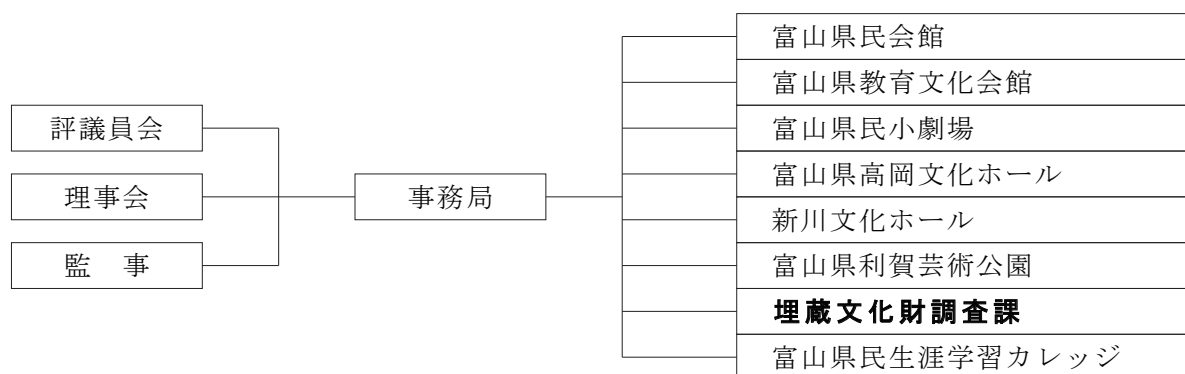
平成4年4月1日 埋蔵文化財課から埋蔵文化財調査事務所へ改組

平成7年4月1日 専任の所長及び副所長を置く事務所として独立

平成24年4月1日 公益財団法人へ移行し、「公益財団法人富山県文化振興財団」に名称変更

平成30年4月1日 「埋蔵文化財調査事務所」から「埋蔵文化財調査課」へ改組

6 組 織



（平成30年4月1日改編）

Ⅱ 埋蔵文化財調査課概要

- 1 名 称 公益財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査課
- 2 所 在 地 〒930-0887 富山市五福 4384 番 1 号 TEL 076-442-4229 FAX 076-433-3797
- 3 施設概要 (1) 敷地面積 1,565.649 m²
(2) 建物規模 軽量鉄骨造 2 階建 延床面積 866.192 m²
- 4 組 織

課 長	総務担当 主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連発掘調査担当 県営農地整備事業関連発掘調査担当 主要地方道高岡小杉線道路改良事業関連遺物整理担当	副主幹 (4)
-----	--	------------

5 職 員

課 長	島田美佐子	副 主 幹	島田 亮仁	副 主 幹	朝田亜紀子
副 主 幹	田中 道子	副 主 幹	青山 晃	副 主 幹	町田 賢一
副 主 幹	越前 慎子	副 主 幹	青山 裕子		
副 主 幹	金三津道子	副 主 幹	高柳由紀子		

Ⅲ 事業概要

1 発掘調査事業

事業名	事業委託者	遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	受託期間
主要地方道富山魚津線道路 橋りょう改築事業に伴う 埋蔵文化財調査	富山県	水橋荒町・辻ヶ堂遺跡	富山市 水橋辻ヶ堂地内	1,112	令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日
県営農地整備事業 (上条中部地区)に伴う 埋蔵文化財調査	富山県	水橋田伏遺跡	富山市 水橋田伏地内	317	令和4年6月27日 ～ 令和5年3月27日
県営農地整備事業 (小長沢地区)に伴う 埋蔵文化財調査	富山県	下邑遺跡	富山市婦中町 小長沢地内	158	令和4年6月27日 ～ 令和5年3月27日
		小長沢Ⅱ遺跡	富山市婦中町 小長沢地内	281	

2 遺物整理事業

事業名	事業委託者	遺跡名	所在地	現地調査 年度	受託期間
主要地方道高岡小杉線道路 改良事業に伴う 埋蔵文化財調査	富山県	南太閤山Ⅰ遺跡	射水市 橋下条地内	令和2年度	令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日

3 刊行物

- ・富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第79集 南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告
- ・とやま発掘だよりー令和4年度発掘調査速報ー
- ・令和3年度 埋蔵文化財年報

4 受贈図書

令和4年4月1日から令和5年3月31日までの間の受贈図書は、合計645冊である。

5 普及事業

(1) 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡説明会

令和4年9月23日（金・祝）午前10時から12時まで遺跡説明会を開催した。新型コロナウイルス感染症に関する感染拡大警報（富山アラート）発出中であったため地元住民を対象とし、約40名の参加があった。調査職員の遺跡全体の説明と出土遺物の展示・解説を行った。



(2) とやま発掘最前線—令和4年度調査成果報告会—

令和5年3月18日（土）午後1時30分から3時30分まで、県民会館304号室において開催した。発掘調査及び遺物整理事業の調査成果を担当者がパワーポイントを使って報告し、発表後には参加者からの質問に答えた。会場では出土遺物の一部を展示し、職員が解説等を行った。新型コロナウイルス感染症対策として事前申込制とし、66名の参加があった。



IV 主な会議・研修

期 間	会議名等	場 所	出席者
10月14日	令和4年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック連絡会	新潟県新潟市	越前 慎子
10月18日	令和4年度埋蔵文化財保護対策五県協議会	Web会議	青山 晃

V 調査概要

1 令和4年度発掘調査

今年度は富山県土木部から主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業に伴い富山市水橋辻ヶ堂地内に所在する水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、農林水産部から県営農地整備事業に伴い富山市水橋田伏地内に所在する水橋田伏遺跡と富山市婦中町小長沢地内に所在する小長沢Ⅱ遺跡・下邑遺跡の発掘調査の委託を受けて本調査を実施した。

2 主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連遺跡発掘調査

みずはしあらまち つじがどう
水橋荒町・辻ヶ堂遺跡

(1) 調査の経緯

①位置と環境

遺跡は富山市北部の常願寺川右岸の河口付近に位置し、遺跡範囲は南北 1200 m、東西 500 m の範囲



水橋荒町・辻ヶ堂遺跡位置図 (1 : 25,000)

に及ぶ。今回の調査区は富山湾海浜部に形成された砂丘上に立地し、現況で標高約2 mとなる。現在の常願寺川河道は明治26年（1893年）に完成した河川改修によるもので、それ以前は遺跡よりも上流側で河道は蛇行し白岩川へ合流していた。

周辺遺跡では浜黒崎野田・平榎遺跡で縄文時代前期が確認されるのが古く、その後は当遺跡を含む複数の遺跡が縄文時代中期～晩期に存在する。弥生時代には滑川市の魚躬遺跡が当遺跡と同様に海浜部近くに位置し、弥生時代中期～終末期の遺跡として知られている。また、当遺跡でも過去の調査により弥生時代後期の溝や柱穴等が確認されており、集落の存在が推測されている。奈良・平安時代では当遺跡で掘立柱建物や道路跡等が確認され、古代北陸道に整備された「水橋駅」の推定地とされる。中世には小出城跡等の城館が存在し、当該期の集落が展開していたとみられる。近世においては遺跡の所在する西水橋地区は漁業・海運により発展し、近世北陸道も通る交通の要衝でもあった。

②調査の経過

主要地方道富山魚津線の常願寺川に架かる現在の今川橋は老朽化に伴い上流側に新たな橋の架け替え工事が進められている。これに伴い常願寺川右岸側の道路も移動することとなり、埋蔵文化財包蔵地内であることから試掘調査が実施された。試掘調査は富山県教育委員会が令和3年に実施し、1,112 m²の本調査が必要と判断され、富山県教育委員会の「埋蔵文化財の本発掘調査における対応方針」（平成23年11月28日）に基づき、財団が令和4年度に調査を受託することとなった。

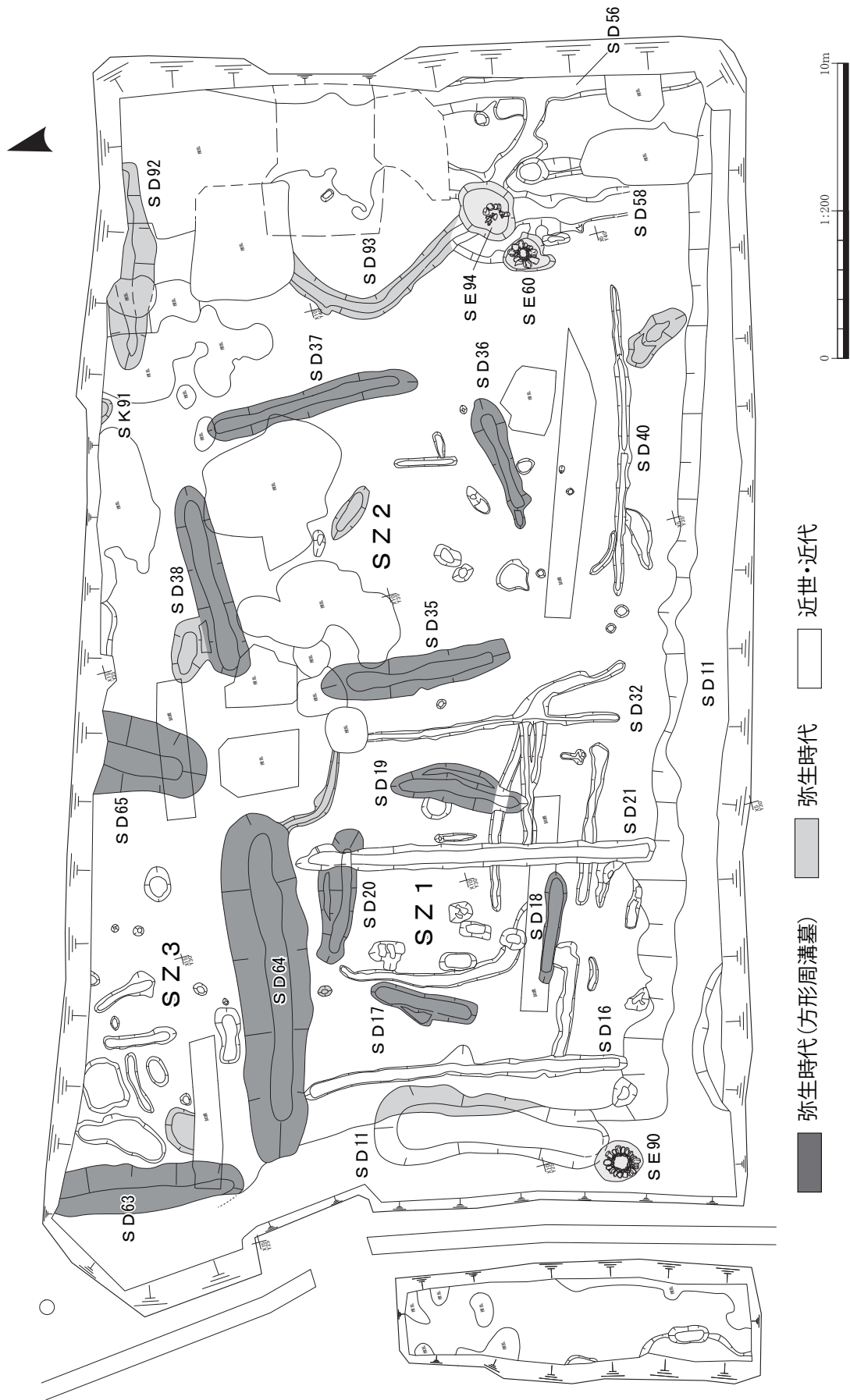
遺跡名 (略号)	地区	調査期間	調査面積 (m ²)	検出遺構	出土遺物	担当者
水橋荒町・ 辻ヶ堂遺跡 (01MA T)	A	7月20日 ～ 10月14日	1,112	方形周溝墓・ 土坑・溝・ 石組井戸	縄文土器・弥生土器・須恵器・ 珠洲・越中瀬戸・伊万里・唐津 ・近代陶磁器・木製品・石製品	青山 晃 島田亮仁 高柳由紀子

(2) 本調査

調査区は遺跡範囲の北西に位置し、現況は宅地で標高は1.7～2.2 mを測る。基本層序はⅠ層：黄褐色～黒褐色砂質土（表土）、Ⅱ層：褐色砂質土～黄褐色砂（地山・遺構検出面）となる。Ⅰ層は地表から0.7～1 mと厚く堆積し、その上位には宅地整備に伴う碎石等を含んでいる。また、宅地整備による攪乱坑が調査区の北東部を中心に多く確認された。遺構検出面の標高は1.1～1.5 mで、調査区の北側がやや低くなっている。検出遺構は方形周溝墓3基、溝36条、土坑48基、石組井戸3基である。出土遺物から遺構の時期は弥生時代と近世・近代に大別される。

弥生時代では後期後半の方形周溝墓SZ1～3が確認された。SZ1・2は四隅切れの平面形態を呈し、SZ3は調査区外に続くため全形は明らかでないが同様になると思われる。SZ1はSD17～20を周溝とし、規模（周溝内側、以下同様）は6.4×6.4 mを測る。南辺となるSD18が試掘トレンチにより全形の不明瞭さがあるものの、幅が他と比べてやや狭い。SZ2はSD35～38を周溝とする。SD36が他に比べ短く、SZ1と同様に南辺となる周溝が他と比べて貧弱な印象を受ける。周溝内側の形状も歪で、規模は8.5×9.2～10 mとなる。SZ3はSD63～65の周溝が確認され、東西方向の規模は12.5 mを測る。SD63はSD11に切られ、西半が消失している。SZ1・2に比べて周溝が幅広で、立ち上がりも緩やかな形態となる。いずれも削平により墳丘や主体部は確認されなかった。調査区全体から当該期遺物の出土は少ないものの、一部の周溝からは壺・甕・高杯が出土しており、供献土器が流入したものと考えられる。その他に調査区北東部に位置するSK91は周溝南端の可

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡全体図 (1 : 200)



能性があり、S D 92 とともに方形周溝墓を形成していたと推測される。また、調査区東部のS D 93 は近世の遺構や攪乱により多くを失っているが、方形周溝墓の周溝となる可能性がある。そうした場合、他と異なる向きや形態を呈した方形周溝墓も存在していたこととなる。なお、S D 93 からは爪状圧痕を器面の一部に施した壺が出土している。何らかのモチーフを表現した絵画土器と考えられる。

近世では溝・土坑・石組井戸が検出されているが、建物跡は確認されなかった。溝では直線的なS D 16・21・32・56・58 が南北方向に作られ、何らかの土地区画と思われる。調査区の西側と南側には幅2 m以上となるS D 11 がある。西側の流れは南北方向、南側の流れは東方向にそれぞれ延びて調査区外へと続く。出土遺物からS D 11 は近世以降に形成され、近代まで存続した水路と考えられる。特に西側の流れは、現在の水路が整備されるまで残っていたようである。石組井戸は3基検出された。石組井戸からは越中瀬戸・伊万里が出土し、S E 60・94 では底部に桶を設置している。また、いずれの井戸も重複する溝・水路に切られており、井戸が機能していた段階の後、水路・溝による土地区画が行われたと考えられる。なお、調査区東に隣接する市道は近世北陸道の推定ルートとされており、街道近くに形成されていた集落の一部であった可能性が高い。(青山 晃)



水橋荒町・辻ヶ堂遺跡全景（南から）



全景（西から）



S Z 1（北西から）



S Z 2（北から）



S D18 遺物出土状況（東から）



S E60（北から）



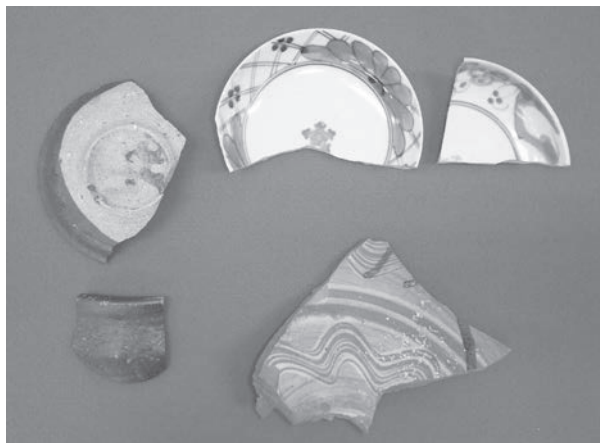
S E60 断割り（南から）



弥生土器



弥生土器



近世陶磁器

みずはし たぶせ
水橋田伏遺跡

①位置と環境

– 9 –

②調査の経緯

県営農地整備事業上条中部地区予定地内では複数の遺跡が周知されており、平成 28 年 10 月から平成 30 年 10 月にかけて富山県教育委員会により試掘調査が実施された。その結果を受け、富山県教育委員会通知「埋蔵文化財の本発掘調査における対応方針」（平成 23 年 11 月 28 日）に基づき、財団が富山県農林水産部から本発掘調査を受託することとなった。調査対象地が 2 か所に分かれることから A・B 地区とし、317 m²について調査を実施した。

遺跡名 (略号)	地区	調査期間	調査面積 (m ²)	検出遺構	出土遺物	担当者
水橋田伏遺跡 (01MT)	A・B	8 月 9 日 ～ 10 月 3 日	317	土坑・溝	縄文土器・土師器・須恵器・ 中世土師器・珠洲・土師質土器 ・越中瀬戸・近世陶磁器・石製品 ・ガラス製品	島田亮仁 高柳由紀子

(2) 本調査

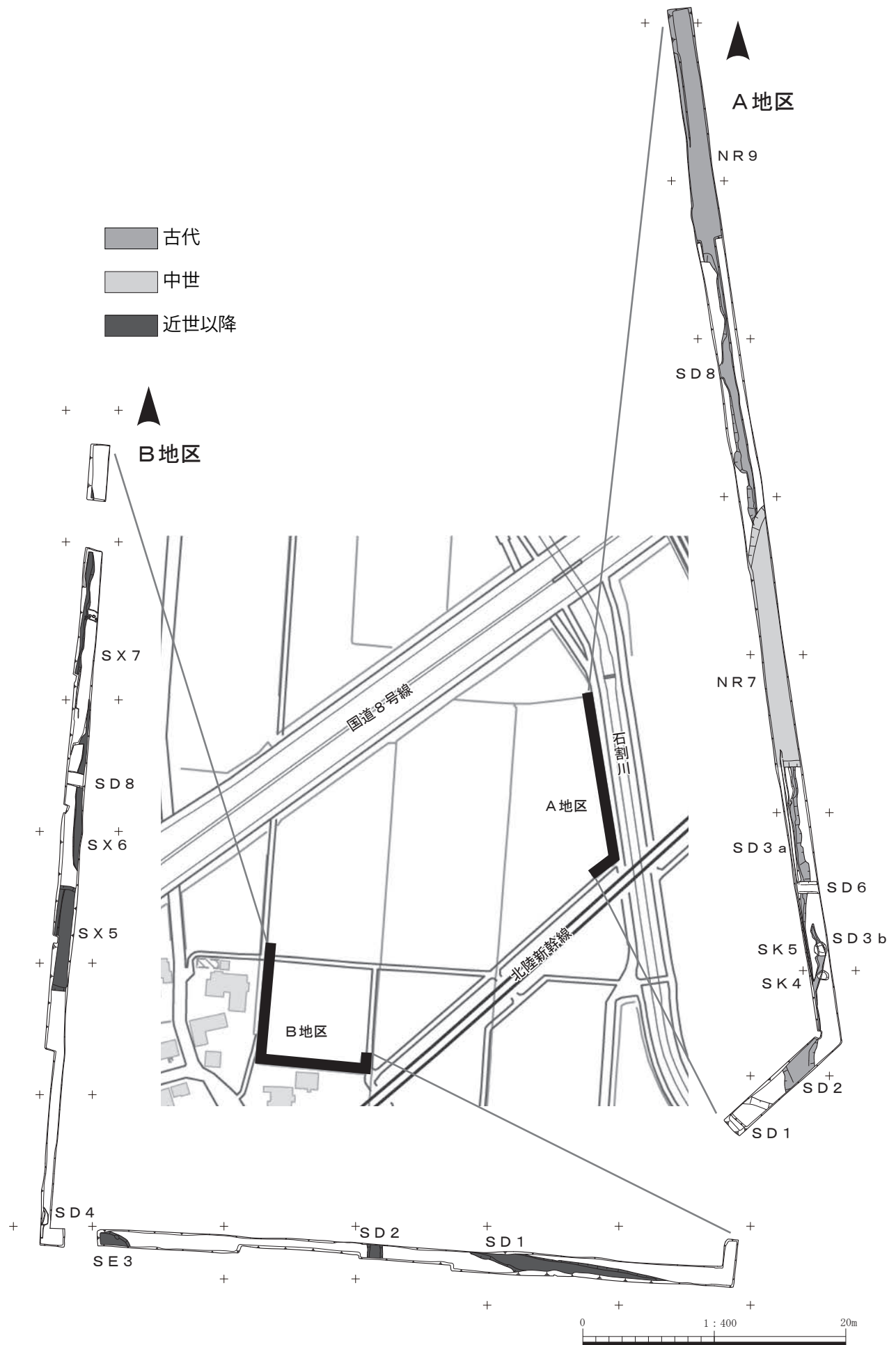
調査地は遺跡の南東部に位置し、現況は水田、農道である。基本層序はⅠa層：灰黄褐色粘質土・暗褐色粘質シルト（耕作土）、Ⅰb層：褐灰色粘質土・灰黄褐色粘質土（旧耕作土・旧床土等）、Ⅱ層：黒褐色粘質土（遺物包含層）、Ⅲ層：灰黄褐色砂質土・黄灰色シルト（地山・遺構検出面）となる。Ⅱ層は最大で 10cm 程度の厚さで、調査区内ではⅠ層直下でⅢ層となる範囲の方が広いことから大部分は削平を受けていると考えられる。遺構検出面の標高はA地区 5.69～5.9 m、B地区 6.48～6.83 mで、調査区域の南西（B地区）から北東（A地区）に向かって緩やかに低くなっていく。さらに東には、白岩川の支川である石割川があり、川へ向かって低くなる地形になっている。

検出した遺構は溝 8 条、井戸 1 基、土坑 2 基、流路 2 条、落ち込み 3 基で、時期は古代、中世、近世である。

古代の遺構はA地区で確認した。SD 2・3は同一の溝とみられ、特に多くの土師器・須恵器が出土した。幅 2.44 m、深さ 0.48～0.62 mを測る。またさらに北にはSD 8がある。出土遺物は小さな破片を中心とする土師器・須恵器で、幅 1.1 m、深さ 0.54 mを測る。これらは中世の流路NR 7に切られるが、方向や規模、時期が重なるため、同一の溝の可能性が高い。SD 8はさらに北の流路NR 9に合流する。県による試掘調査（平成 30 年度：試掘調査時の遺跡名は田伏・佐野竹遺跡）ではSD 3・8の西側にあたる同一の水田内中央寄りで古代の土師器・須恵器を伴う竪穴住居とみられる隅丸の土坑、土師器を伴う溝、柱穴、土坑が見つかった。A地区と比較すると検出面の標高は最大で 27 cm 高く、ここを古代の集落の中心地とみた場合、今回の調査地は集落の縁辺部と考える。

中世ではA地区で流路（NR 7）を確認した。NR 7は古代の溝SD 3・8を切る。南肩の落ち際では 1/8 程度に破碎された石臼（上臼）が、直径 10～20cm の礫と共に廃棄された状態で見つかった。

近世以降ではB地区で溝、井戸、落ち込みが見つかった。SD 1は幅 1.6 m、深さ 0.3 mを測る規模の大きな溝。SD 2は幅 1.2 m、深さ 0.4 mを測り、埋土は黒色粘質土が主体となる。県による試掘調査ではSD 2よりも北側で同様な埋土の溝が 4 区画の水田にわたって続いている。SD 2と同一のものである可能性が高い。井戸SE 3は幅 2.25 m以上、深さ 0.65 m以上で、さらに調査区外に広がる。すぐ南側は民家の敷地で調査区に接して円形の井戸、調査区西側にも 10 m離れた別の民家敷地に現在も使用されている井戸があり、SE 3も集落内の井戸と考えられる。落ち込みSX 5～7はB地区北側で集中して見つかった。調査区の幅が狭いため遺構の全幅は確認していない。長さは 7.98



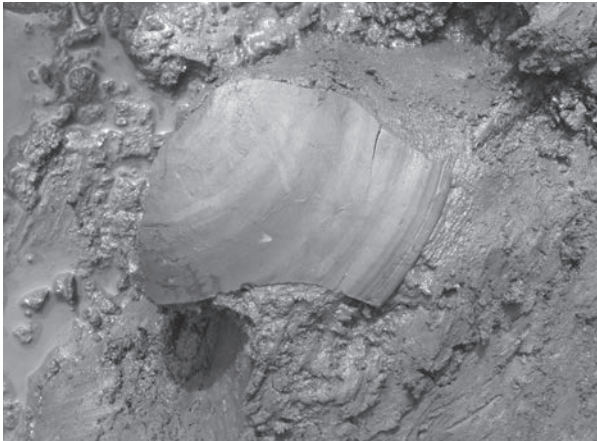
水橋田伏遺跡全体図 (1 : 400)



A地区全景（南から）



B地区全景（東から）



A地区SD3墨書土器出土状況（北から）



B地区SD1調査風景



水橋田伏遺跡A・B地区遠景（北東から）

m～19.3 mまであり、深さは0.08 m～0.33 mを測る。底部は平坦な形状である。昭和28年米軍撮影の空撮写真にはこの箇所は現在とは異なる小区画水田になっており、旧地形を生かした水田が昭和30年代に圃場整備が行われるまで継続していたと考えられる。遺物は越中瀬戸や伊万里など、近世、近代のものが中心に出土した。B地区は現在、集落に隣接した水田で、近世でも同様に農地と考える。見つかった溝、落ち込みは農地に関わるものと考えられる。

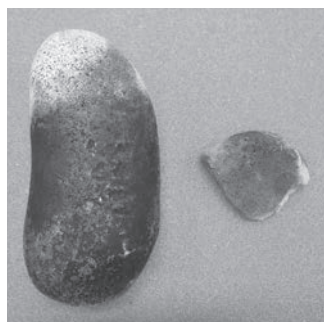
出土遺物は縄文土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・土師質土器・越中瀬戸・近世陶磁器・石製品・ガラス製品がある。

縄文土器はA地区の古代の溝SD8から出土した。底部のみの小片で、摩耗している。県による試掘調査でも晩期の縄文土器の出土があり、今回も同様に晩期頃の土器と考えられる。そのほかに敲石がA地区の古代の溝SD2から出土した。外面2/3にススが付着し、その前後の使用痕がみられる。

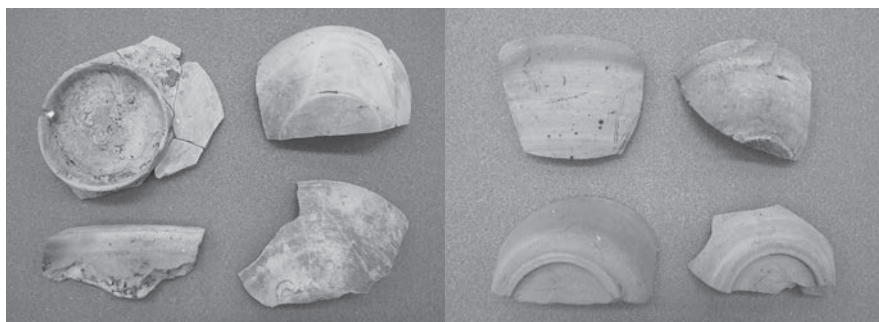
古代では9世紀後半から10世紀初頭の土師器・須恵器がある。今回の調査で最も多くの遺物が出土した時期で、A地区SD2とSD3からまとまって出土した。土師器には赤彩され、体部外面に逆に「連」と墨書される碗も見つかっている。

中世では、中世土師器皿、珠洲の播鉢、甕、壺、石臼が出土した。石臼は上臼で、側面には挽き木を打ち込む方形の窪みが残存する。

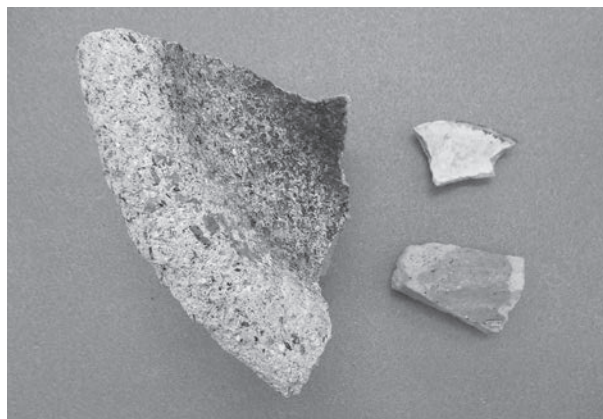
近世ではB地区から越中瀬戸皿、伊万里・唐津の小片、土師質土器が出土した。ガラス製品は青色の一般用薬品瓶で、「神薬」と陽刻される。神薬は明治5年頃より様々な製薬会社が発売した薬であるが、社名やその他の表示がなく詳細は不明である。
(高柳由紀子)



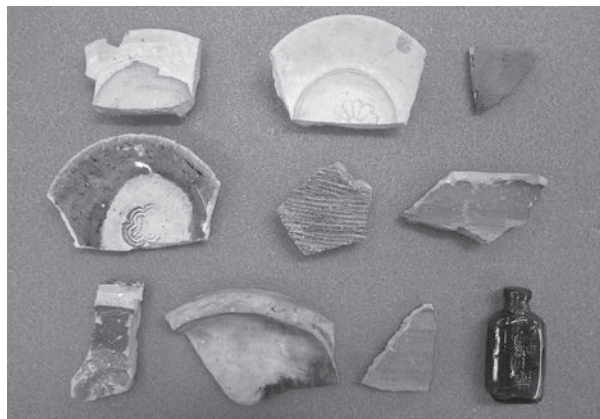
縄文時代の遺物



古代の遺物



中世の遺物



中近世以降の遺物

こながさわ しもむら 小長沢Ⅱ遺跡・下邑遺跡

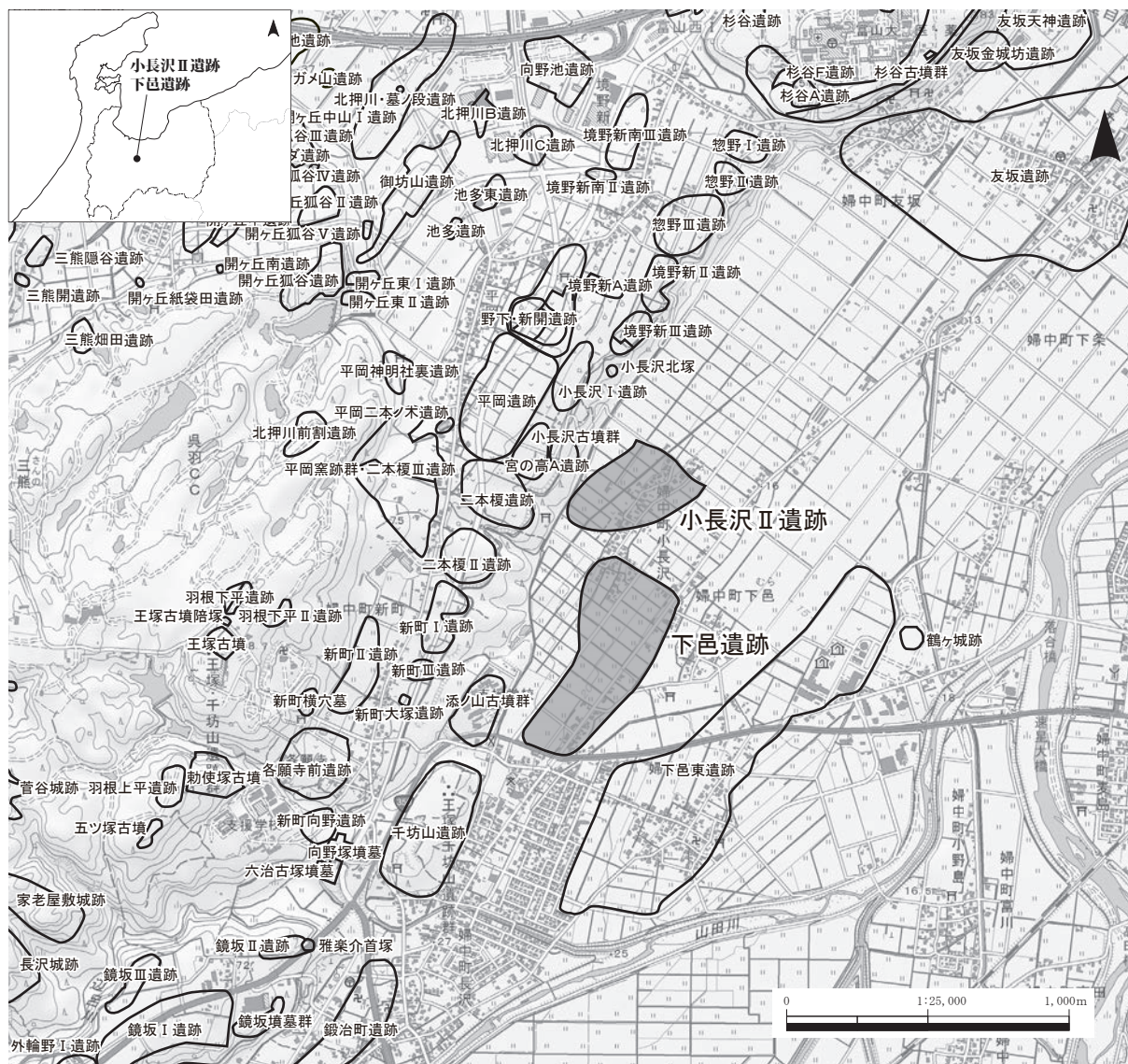
(1) 調査の経緯

①位置と環境

小長沢Ⅱ遺跡と下邑遺跡は富山市婦中町小長沢地区に所在し、呉羽丘陵の東裾の平野部に位置する。山田川の支流である辺呂川左岸の標高約18～19mに立地している。周辺遺跡では呉羽丘陵上に、旧石器時代～近世に至る多くの遺跡が分布し、県内でも有数の遺跡密集地域である。古墳時代では王塚・千坊山遺跡群をはじめ多くの古墳が築かれ、古代では窯業・製鉄業が盛んに行われた。中世になると富崎城跡や安田城、鶴ヶ城などの城館が存在する。

②調査の経過

富山市婦中町小長沢地区で県営農地整備事業が継続しており、この事業に伴う調査として今年度の本発掘調査を実施した。令和元年～令和2年に富山市教育委員会により試掘調査が実施され、その結果、小長沢Ⅱ遺跡と下邑遺跡の2遺跡の本調査対象範囲が確定された。今年度の調査は水路工事部分を対象としている。



小長沢Ⅱ遺跡・下邑遺跡位置図（1：25,000）

遺跡名 (略号)	地区	調査期間	調査面積 (㎡)	検出遺構	出土遺物	担当者
小長沢Ⅱ遺跡 (01K S 2)	A	10月27日 ～ 11月28日	281	溝・小穴	土師器・珠洲・白磁・青磁・ 近世陶磁器・木製品	島田亮仁 高柳由紀子
下邑遺跡 (01S M)		10月7日 ～ 10月26日	158	溝・自然流路	土師器・須恵器・珠洲・越中瀬戸・ 近世磁器・木製品	

(2) 本調査

①小長沢Ⅱ遺跡

小長沢地区では昭和40年代に圃場整備が実施されている。調査は水路工事部分であり、幅約3.6m、長さ約83mの細長い調査区である。標高は約18～19mで、現況は未舗装の農道である。調査区の隣接地は水田であり、壁面や検出面、暗渠からは水が湧き出るような低湿地環境である。試掘調査では検出面の多くが、現耕作土（鋤床を含む）もしくは客土直下である。

基本層序はⅠ層が灰黄褐色粘土質砂で、盛土もしくは客土である。Ⅱ層は粘性の高い黒褐色粘土質砂で、包含層とみられる。遺構の埋土の多くもⅡ層に近似した堆積物である。Ⅲ層は灰色粘土で基盤層であり、粘性が著しく高い。遺構検出は基盤層であるⅢ層の直上で実施し、溝や小穴を確認した。

遺構は主に西側に展開しており、東側はほとんど確認されなかった。明確な溝は7条あり、調査区を南北方向に流れるものが多い。SD2は調査区西端を南東から北西方向に延びる溝で、幅約5.8m、深さは検出面から約0.4mである。底面には、溝状の幅の狭い落ち込みが3条並走する。作り替え等を想定したが、切り合いや明確な埋土の違いは認められなかった。埋土はオリーブ褐色細～中砂である。遺物には曲物もしくは桶の底板が1/2程度残存した個体が出土している。SD6は調査区中央付近を南東から北西方向に延びる溝で、幅約3.4m、深さが検出面から約0.6mを測る。埋土の上位はオリーブ黒～黒色のシルト質砂で、有機物の分解が進んだ堆積物である。下位は砂質粘土で、未分解の有機物（草本が主体）が含まれている。小穴は柱穴の可能性も否定できないが、小規模で、埋土にしまりが無い。これらの遺構は、出土遺物や埋土、配置などから中世以降に構築されたものと考えられる。

出土遺物には弥生土器、土師器、珠洲、白磁、青磁、越中瀬戸、近世陶磁器、木製品がある。土器は小片が多く、表面や割口は摩耗が著しい。

②下邑遺跡

水路工事部分のため、幅約3.2m、長さ約46mの細長い調査区である。標高は約19mで、現況は水田である。小長沢Ⅱ遺跡と同様に、調査区の壁面や検出面からは水が湧き出るような低湿地環境である。

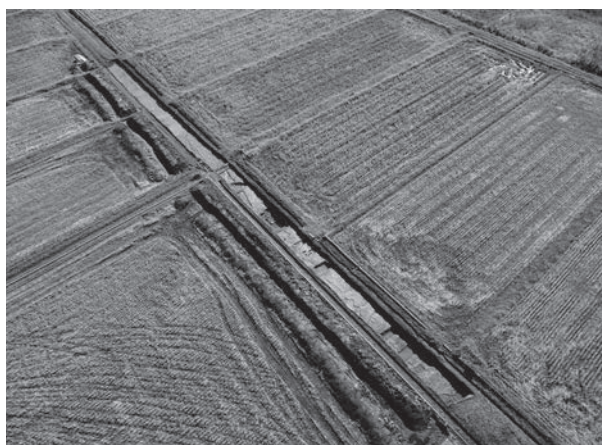
基本層序はⅠ層が黒褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土で、鋤床や客土である。包含層は確認されず、Ⅱ層は灰色粘土で基盤層となり、その直上で溝（SD2）や自然流路（NR1）を確認した。

自然流路は調査区の南側で検出した。北側（左岸）の立ち上がりは確認されたが、南側（右岸）は調査区外となるため、川幅は不明である。深さは検出面から約0.5mで、南側へ緩やかに傾斜している。周辺地形から呉羽丘陵に沿うように流れていたと考えられる。埋土は上位で暗オリーブ灰色礫砂が堆積し、下位はシルト質粘土に未分解の有機質（木本が主体）が含まれる。遺物は有機質層からの出土は確認されなかったが、砂礫～礫砂層からは摩耗した須恵器や珠洲が出土している。自然流路の埋没時期は上位の砂礫～礫砂で少なくとも中世以降と考えられる。

遺物は土師器、須恵器、珠洲、越中瀬戸、近世磁器、木製品が出土している。（島田亮仁）



小長沢Ⅱ遺跡遠景（南東から）



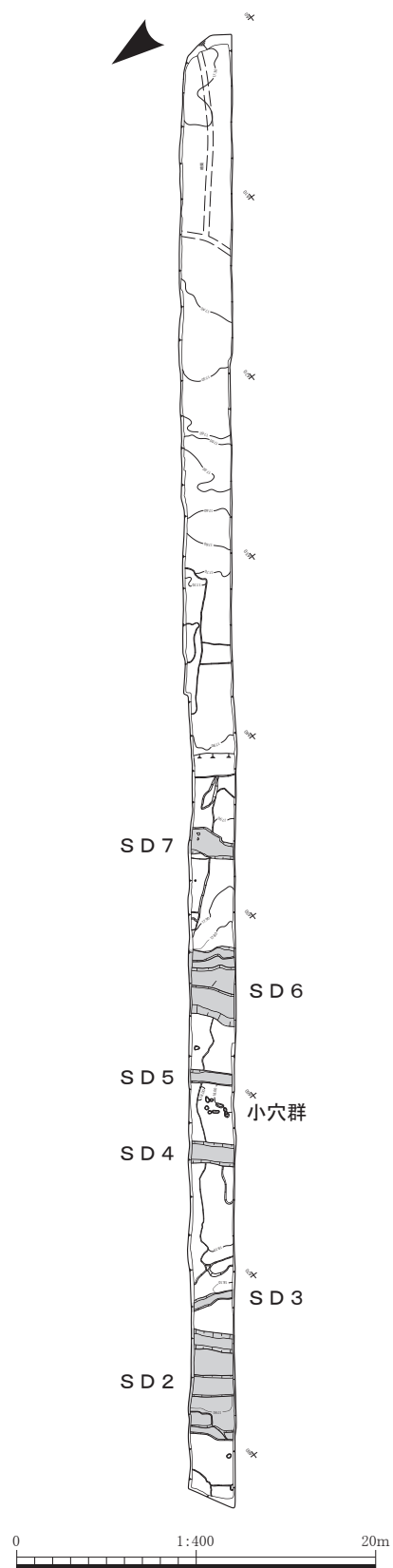
小長沢Ⅱ遺跡全景（北西から）



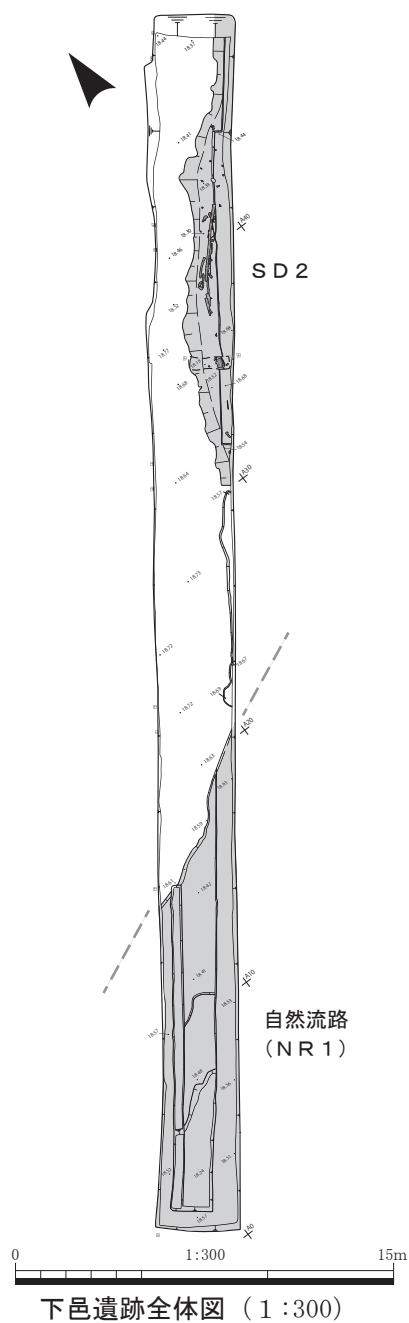
小長沢Ⅱ遺跡溝群（西から）



小長沢Ⅱ遺跡遺物出土状況（南から）



小長沢Ⅱ遺跡全体図（1：400）



下邑遺跡全景 (南西から)



下邑遺跡自然流路 (NR 1) (西から)



下邑遺跡遠景 (北から)

VI 研究レポート

縄文時代前期の古植生

島田 亮仁

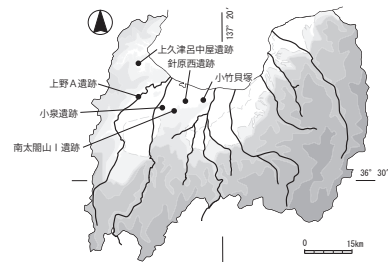
はじめに

人間活動が活発になる以前の富山県の平野部から丘陵地にかけての原植生は、一般的に照葉樹林が優占する森林が想定されている^{注1}。その根拠となっているのが平野部から丘陵にかけて点在する樹叢である。樹叢の中には、常緑広葉樹のウラジロガシやアカガシなど照葉樹林の主要構成要素と考えられる樹種が分布している。しかし、実際に縄文時代以降の遺跡の花粉分析や種実同定などの分析結果をみると、常緑広葉樹林が卓越するデータが得られないことがしばしばある。とりわけ、縄文時代前期では現在県内でみられる冷温帯落葉広葉樹林の標徴種であるブナの花粉や堅果、殻斗が平野部から丘陵地の縁辺部の遺跡から確認されているのである。この点については、早くから吉井が疑問を呈しており^{注2}、また、重要視している点でもある。以前、筆者は富山県内の縄文遺跡の植生について、種実遺体から遺跡周辺の植生を推定したことがある^{注3}。今回は縄文時代前期の遺跡で実施された各分析結果から、当時の古植生について考えてみる。

1. 対象遺跡

(1) 小竹貝塚（前期中葉～末葉）

富山市の呉羽丘陵地と射水平野に接する末端に位置する低湿地性貝塚で、標高約3mに立地する。日本海側最大級の貝塚で、縄文時代前期中～後葉を中心に、居住域、墓域、廃棄域を有する集落である。土器や各製品類、埋葬人骨など豊富な出土品がある。



第1図 富山県の縄文時代前期の遺跡

〈花粉分析^{注4}〉樹木ではクリが多く、クリの疎林が分布し^{注5}、草本では乾燥した場所に生育するアカザ科－ヒユ科、イネ科が優占する。ハンノキ属、コナラ亜属（ミズナラ）の他に、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキが出現している。ハンノキ属は湿地林を形成し、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキはやや湿潤地に分布する。

〈種実遺体^{注6}〉堆積地周辺ではニワトコ、アカメガシワ、ミズキ、キハダが生育していた。近隣では、アサダ、コナラ亜属、クリ、オニグルミ、コブシ、キハダ、ムクノキ、エゴノキ属などの落葉樹が生育し、やや乾燥した場所には草本のカナムグラが、水辺にはオニバス、コウホネ、ヒルムシロ属などの水湿地生植物が繁茂していたと推定された。栽培植物にはササゲ属、マメ類、エゴマ、シソ属、ヒョウタン類がある。

〈樹種同定^{注7}〉埋没樹木にはマツ属複維管束亜属1、ヤナギ属1、コナラ節5、クリ1、ムクノキ1、エノキ2、ケヤキ2、バラ科ナシ亜科1があり、現地性が高い。加工木には、針葉樹ではマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ科、イヌガヤがあり、広葉樹ではヤナギ属、ハンノキ亜属、クヌギ節、コナラ節、クリ、ムクノキ、エノキ属、ケヤキ、ツバキ属、バラ科ナシ亜科、トチノキ、ムクロジ、シキギ属、ハリギリ、トネリコ属、リョウメンシダがある。

〈古環境復元^{注8}〉住居域・墓域は、草本のカナムグラ、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が繁茂し、樹木で

はアカメガシワ、カラスザンショウ、ニワトコが分布していた。このことから日当たりの良い開けた景観が推定される。また、近隣では管理されたクリ林が存在していたと考えられる。水辺にはハンノキの湿地林が成立し、ヒルムシロ属、オニバス、ヒシ属（ヒシ）の水湿地生植物が分布していたと推定される。栽培植物にはササゲ属、マメ類、エゴマ、シソ属、ヒョウタン類などがある。

遺跡周辺では、コナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が広がり、アサダ、オニグルミ、ムクノキ、トチノキ、ケヤキの落葉広葉樹などが混生していた。また、自然木でマツ属複維管束亜属、ヤナギ属、クリ近似種、コナラ属コナラ亜属、エノキ属、ムクノキ、ケヤキ（ケヤキ近似種）、バラ科ナシ亜科、ハリギリなどが出土しており、現地性が高く、堆積地近隣から周辺に生育していたと推定される。また、前期後葉～末葉にかけては、アカガシ亜属やモチノキ属などの常緑広葉樹も混生した混交林の存在が推定される。

丘陵地では、コナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が広がり、ブナ属、ニレ属－ケヤキ、ムクノキ、トチノキなどの落葉広葉樹も生育していたと推定される。また、スギ、マツ属複維管束亜属、イヌガヤ、カヤなどの常緑針葉樹も部分的に分布した混交林が推定される。

（２）南太閤山Ⅰ遺跡（前期前半）

射水市（旧射水郡小杉町）の射水平野最奥部に位置し、下条川の支流が開析する射水丘陵の縁辺部の標高約 10 m に立地する。調査は 1982 ～ 1985 年と 2020 年に発掘調査され、縄文時代前期の谷や弥生時代後期の方形周溝墓、古代の流路などが検出されている。とりわけ縄文時代前期の谷では多量の土器の他に、石器、木器、骨角器、植物遺体が良好な状態で出土している。

① 1982 ～ 1985 年の調査

〈花粉分析^{注9}〉コナラ亜属が優占、周辺山地や丘陵地では、ナラ類、ブナ、ケヤキ、クリ、エノキ、ムクノキ各属からなる落葉広葉樹林が形成されていたと考えられる。平野部や山麓にはアカガシ亜属、シイノキ、アカメガシワ各属などの暖温帯森林要素も生育し、暖温帯落葉広葉樹林（ナラ－クリ）が形成されていたと推定される。クリ、オニグルミがやや高率であるため、近隣に生育していたと推定された。特にクリについては積極的に保護・管理した可能性が高いと推定された。クリ属とクルミ属が上位に向かって増加傾向にあるが、その一方でスギ属は低率である。

〈種実同定^{注10}〉堆積物は食物残渣として投棄されたものが主体で、自然堆積したものを含む。多くは当時の射水丘陵地北部に生育していた植物に由来すると推定された。丘陵地にはカヤ、オニグルミ、コナラ亜属、クリ、ホオノキ、トチノキなどの落葉広葉樹が主体の森林が分布していたと推定された。湿地にはハンノキ林が成立し、草本のオニバス、コウホネ、マツモ、ヒシなどの水生植物が遺跡の東側一帯は、現在の十二町潟のような開放水域の存在が推定された。栽培植物にはヒョウタン類（赤漆塗果皮）が検出されている。

② 2020 年の調査

〈花粉分析^{注11}〉集落近隣では、縄文人によって一定の管理下に置かれていたクリ林が分布していた。低湿地の傍にはヤナギ属やトチノキ属が分布していた。後背地の丘陵地にはコナラ属コナラ亜属を主体に、エノキ属－ムクノキ属、クマシデ属－アサダ属、キハダ属、カエデ属、クルミ属などが混生した落葉広葉樹林が広がっていた^{注12}。

〈微化石分析（花粉分析）^{注13}〉遺跡周辺から立山連峰山麓にかけてコナラを主体とする温帯落葉広葉樹林が広く分布し、立山連峰中腹にミズナラとブナを主体とする冷温帯落葉広葉樹林が分布していた

と考えられる。遺跡近隣ではサワグルミ属ークルミ属が生育し、ツバキ属も生育していたと推定される。また、下条川流域ではニレ属ークヤキ属やエノキ属ームクノキ属を主要素とする自然堤防林を形成していたと考えられた。湿地内では草本の湿性植物のイネ科、カヤツリグサ科、ヤマドリゼンマイや浮葉植物のヒシ属、コウホネ属が分布していたと考えられる。

〈種実同定^{注14}〉遺跡内ではカナムグラ、イヌタデ属、ギシギシ属、ヤエムグラ、オナモミ、キク科などのやや乾燥した場所に生育する陸生植物が分布し、低地から平場周辺の一定の水深のある止水域や湿地では、マツモ、ヒシ属、オニバス、ジュンサイ、ヒルムシロ属、コウホネ、ミクリ属、ホタルイ属、ウキヤガラなどの水湿地生植物が繁茂していたと推定される。遺跡周辺から後背丘陵地ではコナラ属コナラ節、ナラガシワ、モクレン属、フジ属、ブナ、オニグルミ、トチノキなどの落葉広葉樹を主体に、カヤ、イヌガヤの常緑針葉樹やヒサカキ、ツバキ属の常緑広葉樹が生育する混交林が分布していたと推定される。沢沿いや谷などの適潤地にはコブシ、ホオノキ、オニグルミ、サワシバ、トチノキ、ミズキ、クマノミズキなどが分布し、林縁にはフジ属、ブドウ属が繁茂していたと推定される。栽培植物にはアサ（赤漆塗糸の素材）、シソ属、ヒョウタン類がある。

〈樹種同定^{注15}〉自然木では、コナラ属コナラ節、ヤナギ属が多産し、エノキ属、イヌガヤ、コナラ属クヌギ節、トネリコ属シオジ節、クワ属、クリ、カエデ属、ハンノキ属ハンノキ節が検出されている。また、根材にはコナラ属コナラ節、ヤナギ属、トネリコ属、クワ属、クリ、ハンノキ属ハンノキ節が検出されている。特に根材については現地性が高く、遺跡近隣～周辺に生育していたと推定される。加工材にはコナラ属コナラ節、ヤナギ属が最も多く、エノキ属やクワ属、クリ、トネリコ属シオジ節、カエデ属が使用されている。

〈炭化材の樹種^{注16}〉炭化材樹種では、クリ、コナラ節が多量に検出され、次にクヌギ節、ブナ属が続く。他に、アカマツ、ブドウ属、フジ属、サクラ属、ケンボナシ属、ムクノキ、エノキ属、クワ属、ハンノキ属ハンノキ節、クマシデ属イヌシデ節、ヤナギ属、ヌルデ、カエデ属、ムクロジ、キハダ、ミズキ、ツバキ属、エゴノキ属、マタタビ属、トネリコ属トネリコ節、トネリコ属シオジ節がある。

（3）上久津呂中屋遺跡（早期末葉～中期初頭）

氷見市の氷見平野最奥部に位置し、丘陵地裾部の標高約3～21 mを測る。縄文時代早期末葉～中期初頭を中心とし、多量の土器や各種製品が出土している。

〈花粉分析・種実同定^{注17}〉丘陵地縁辺部ではハンノキ属、アサダ、イヌシデ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ、ケヤキ、クワ属、マタタビ属、ヒサカキ属、アカメガシワ、カラスザンショウ、カエデ属、トチノキ、モチノキ属、ブドウ属、ノブドウ、イイギリ、キブシ、ミズキ、クマノミズキ、タラノキ、ハリギリ、ムラサキシキブ属、タニウツギ属、ニワトコなどが分布していたと推定される。アカガシ亜属、コナラ亜属、ブナ属などは丘陵地上でも森林を構成していたと推定される。カシ類（アカガシ亜属）などの常緑樹林は沿岸部の海拔が低い地域に分布し、コナラ亜属やブナなどの落葉樹林は内陸の丘陵地を中心に分布していたと推定される。また、マツ属は浸食により崩壊した斜面地や砂堤上などの海岸に生育していたと推定される。

〈種実同定^{注18}〉集落域では、マツ属複雑管束亜属、カラスザンショウ、アカメガシワなどの日当たりの良い開地や伐採地などに先駆的に進出する二次林的要素の強い分類群が分布していたと推定される。また、マツ属複雑管束亜属は海岸近くに生育していた可能性がある。遺跡周辺からはさほど離れていない丘陵地には、コナラ属コナラ亜属、ブナ、コブシ、カエデ属、オニグルミ、トチノキ、エゴノキ

属などの落葉広葉樹林を中心に、コナラ属アカガシ亜属、ツバキ属の常緑広葉樹が混生する豊かな森林が分布していたと推定される。林縁にはフジ属などの蔓性植物が繁茂していたと考えられる。栽培植物ではヒョウタン類があり、主に容器として利用された。

〈樹種同定^{注19)}〉埋没樹根（30点）があり、アカマツ4、カヤ5、スギ1、ハンノキ節10、エノキ属1、カエデ属2、ヤマグワ1、樹皮2、ヒダナシタケ目がある。これらは多少の時期差があると考えられるが、現地で生育していたとみなされる。また、自然木にはマツ属複雑管束亜属9、ヒノキ1、ニレ属2、ヤマグワ2、カエデ属1、トネリコ属1、トチノキ1、クリ1がある。これらについても近隣もしくは周辺に生育していた樹種起源と推定される。

（４）上野A遺跡（前期末葉）

高岡市福岡町の砺波平野北西端に位置し、小矢部川左岸の台地上の標高約30mに位置している。縄文時代前期中葉～中期前葉、晩期中葉、弥生時代中期後半～後期の土器が出土しており、縄文時代前期後葉の遺構は、溝や自然流路がある。

〈花粉分析^{注20)}〉後背丘陵地や山地ではコナラ亜属を主体に、ニレ属－ケヤキ属などの冷温帯落葉広葉樹林が分布し、やや標高が高いところにはブナ属が分布していたと推定される。局地的な要素としては虫媒花であるキハダ属、ウルシ属などが生育していたと推定された。

〈種実同定^{注21)}〉コナラ亜属（幼果）、トチノキ（種子、幼果）では利用できない部位である幼果が検出されていることから、遺跡の周辺では温帯落葉広葉樹林が分布していたと推定された。他にトチノキ、サクラ属なども生育していたと推定された。

（５）針原西遺跡（前期末～中期前葉）

射水市（旧射水郡小杉町）の射水丘陵の境界付近の射水平野に位置し、標高約3mを測る。調査は縄文時代前期末～中期中葉の川跡や貝層や、古代の溝などが確認されている。縄文時代は中期が主体だが、前期末葉の貝塚からは多量の土器の他に、石器、木器、骨角器、植物遺体が良好な状態で出土している。

〈花粉分析^{注22)}〉後背山地や丘陵地ではコナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林に、マツ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属、エゴノキ属、トネリコ属を伴うと推定される。局地的要素としては、堆積地周辺にハンノキ属を中心にトネリコ属などの湿地林が分布していた。

〈樹種^{注23)}〉トネリコ属、ハンノキ属、ヤマウルシ、モクレン属があり、これらは近隣に生育していたものからもたらされたとみなされる。

〈種実同定^{注24)}〉森林を構成する分類群が少なく、カラスザンショウ、アカメガシワ、ガマズミ属などの二次林的要素が高い。草本ではヒルムシロ属、スゲ属、ヒシなどの水湿地生植物が多い。その一方で、タデ属、カラムシ属、スミレ属、ナス属などの陸生植物が検出されたことから、日当たりの良い、やや乾燥した環境が推定された。

（６）小泉遺跡（前期後葉～末葉）

射水市（旧射水郡大門町）の射水平野の庄川と和田川に挟まれた、標高約11～12mに位置する。縄文時代前期後葉～末葉と中期前葉の土器が出土し、埋没林も検出されている。

〈花粉分析^{注25)}〉7000～8000年（？）前では周辺にはブナ・ナラの冷温帯林が沖積低地まで分布してい

たと推定された。湿地周辺ではハンノキ林が生育していたと推定された。縄文時代前期前半では、バラ科やカエデ属を中心とした二次林的性格の強い森が分布し、ブドウ科やトチノキ属を伴っていたと推定される。縄文時代前期後半では、クリ林が分布し、保護・管理された半栽培が推定された。トチノキ、ウルシ属、ユリ科、マメ科なども利用されていたことが推定された。

2. 推定される古植生

以上の各遺跡の分析結果から推定された縄文時代前期の植生について、筆者なりに考えてみる。

集落内～集落域近隣:小竹貝塚や南太閤山Ⅰ遺跡では、集落内はやや乾燥した開けた環境が推定された。そこには、草本のカナムグラやキク科などが分布し、樹木はアカメガシワ、カラスザンショウ、ニワトコなどの日当たりの良い開けた場所に生育する二次林的要素の高い低木が分布していたと推定された。また、小竹貝塚や上久津呂中屋遺跡では埋没樹根が検出され、コナラ節、マツ属複雑管束亜属（上久津呂中屋遺跡ではアカマツ）、エノキ属（エノキを含む）が同定されていることから、その場所に生育していたとみなされる。その他には、小竹貝塚でヤナギ属、クリ、ムクノキ、ケヤキが、上久津呂中屋遺跡でカヤ、スギ、ヤマグワ、カエデがそれぞれ同定されている。

集落域と接するように水域や水湿地が存在する遺跡には、南太閤山Ⅰ遺跡、針原西遺跡、小竹貝塚、上久津呂中屋遺跡があり、そこではハンノキ属を中心に湿地林が広がり、南太閤山Ⅰ遺跡、針原西遺跡、小竹貝塚では水辺にはトネリコ属やヤナギ属を伴うことが推定される。上久津呂中屋遺跡では埋没樹根でハンノキ属ハンノキ節が多く確認されている。また、小竹貝塚、南太閤山Ⅰ遺跡ではオニバス種皮片やヒシ属果皮片が多量に出土していることから、水湿地に生育していたものを採集し、食用としていたと考えられる。

南太閤山Ⅰ遺跡や小竹貝塚、小泉遺跡はクリの花粉が高率で出現していることから、集落域の近隣では人間によって維持・管理されたクリ林の存在が推定されている。南太閤山Ⅰ遺跡では花粉分析の他に炭化樹種でも優占している。

栽培植物では南太閤山Ⅰ遺跡でアサ、シソ属、ヒョウタン類が、小竹貝塚でササゲ属、マメ類、エゴマ、シソ属、ヒョウタン類が、上久津呂中屋遺跡でヒョウタン類が検出されており、集落内もしくは近隣で栽培されていたことが推定される。

遺跡周辺～丘陵地:コナラ属コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林が広く分布していたと推定される。エノキ属－ムクノキ属、ニレ属－ケヤキ属、ブナ属^{注26}、クルミ属、クマシデ属、アサダ属、クワ属、トチノキ、カエデ属が構成要素として成立していたと推定される。他に、マツ属複雑管束亜属、スギ^{注27}、カヤ^{注28}、イヌガヤ^{注29}、スギなどの常緑針葉樹やツバキ属^{注30}、サカキなどの常緑広葉樹などが混生する自然度の高い混交林が分布していたと考えられる。また、常緑広葉樹で照葉樹林の主要構成要素となりうるアカガシ亜属^{注31}も小規模ながら分布していたと推定される。

丘陵地～低山地:遺跡が平地に立地しているということもあり、丘陵地～低山地の植生には推定の域を出ないが、花粉分析の結果から、おおむね遺跡周辺～丘陵地に分布している樹種で構成されていたと推定される。しかし、樹種の占有率については、標高が高くなるにつれて、遺跡から離れるにつれて自然度の高い植生が分布していたと推定される。コナラ属コナラ亜属（コナラの他に、ミズナラも含む）が主体の落葉広葉樹林が広く分布するが、遺跡周辺と比較してブナやトチノキなどの現在の冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素の占める割合が高くなることが推測される。遺跡周辺でみられたスギ、カヤ、イヌガヤなどの常緑針葉樹やツバキ属、サカキなどの常緑広葉樹林などについては、分布

範囲を狭めて小規模もしくは中には分布していなかった分類群もあったと推測される。

山地：遺跡のような集水域の限られた堆積環境から得られた花粉分析データでは、標高の高い山地の植生を推定することは困難である。推定に推定を重ねるとするならば、山地ではコナラ属コナラ亜属（ミズナラ）、ブナ、トチノキなどが主要構成要素の、現在の冷温帯落葉広葉樹が分布し、標高が高くなるにつれてモミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属など針葉樹を主体とした常緑針葉樹林が分布する森林が想定される。

まとめ

1. 今回、平地から標高 30 m の台地に立地する 6 遺跡から得られた分析データから、縄文時代前期の古植生について推定してみた。

2. 集落内～集落域近隣では、やや乾燥した開けた景観で、草本のカナムグラやキク科、樹木のアカメガシワ、カラスザンショウ、ニワトコなどの二次林的要素の高い低木が分布していたと推定された。また、埋没樹根では、コナラ節、マツ属複維管束亜属（上久津呂中屋遺跡ではアカマツ）、エノキ属（エノキを含む）が生育し、他にカヤ、スギ、クリ、ケヤキなどの多種類の樹木が生育していた。

集落域と接するような水域では、ハンノキ属を中心とした湿地林が広がり、オニバスやヒシ属を採集し、食用としていたことが推定された。また、集落近隣では維持・管理されたクリ林の存在が推定された。

3. 遺跡周辺～丘陵地では、常緑広葉樹で照葉樹林の主要構成要素となりうるアカガシ亜属が優占することはなく、コナラ属コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林が分布していたことが推定された。この落葉広葉樹林にはコナラ属コナラ亜属の他に、ブナ属、トチノキ、カエデ属などの落葉樹広葉樹、マツ属複維管束亜属、スギ、カヤ、イヌガヤ、スギなどの常緑針葉樹、ツバキ属、サカキなどの常緑広葉樹などが混生する自然度の高い混交林であったことが推定された。

4. 丘陵地～低山地では、現在の冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素であるコナラ属コナラ亜属（コナラの他に、ミズナラも含む）や、ブナ、トチノキなどが占める割合が高くなる落葉広葉樹林が推定された。

5. 山地では、推定の域を出ないが、コナラ属コナラ亜属（ミズナラ）、ブナ、トチノキなどの主要構成要素である冷温帯落葉広葉樹林が分布し、標高が高くなるにつれてモミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属などを主体とした常緑針葉樹林が分布する森林が分布していたと想定された。

6. 縄文時代前期では、既にアサ、エゴマ、シソ属、ササゲ属、マメ類、ヒョウタン類の栽培植物が利用されていた。

注

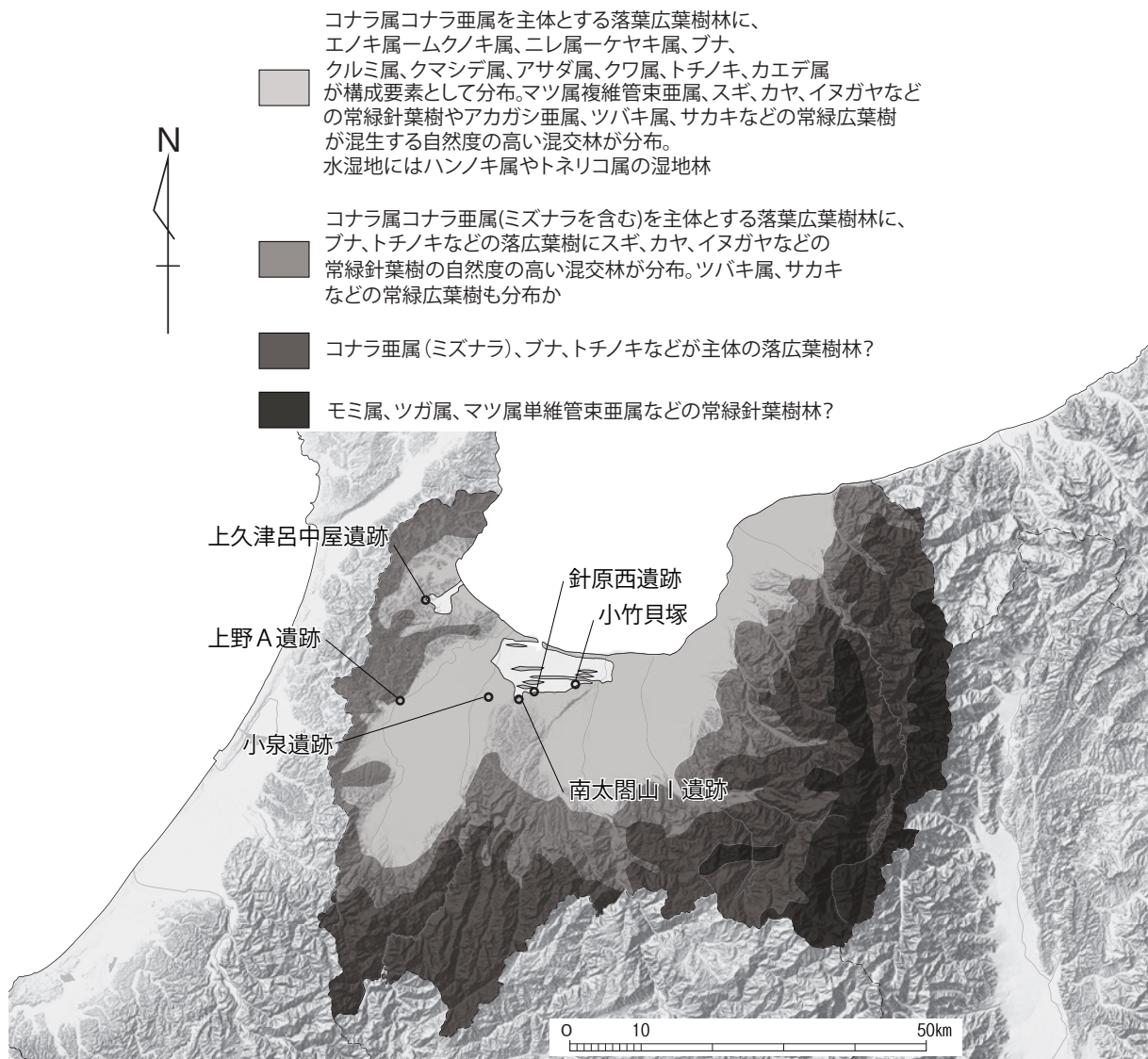
注 1 富山県植生調査研究会 1977

注 2 吉井亮一 1992 「富山県朝日町境 A 遺跡から出土した種実遺体の概要」『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編 7 境 A 遺跡総括編』富山県教育委員会

注 3 島田亮仁 2017 「富山県内の縄文遺跡における古植生」『平成 28 年度埋蔵文化財年報』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課

注 4 金原正子 2014 「土壌分析」『小竹貝塚発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注 5 集落周辺にクリの疎林の存在も推定されているが、B 地区で花粉の出現率が高いことから管理されたクリ林が隣接していた可能性が高い。



第2図 縄文時代前期の古植生模式図

- 注6 島田亮仁 2015 「小竹貝塚の種実遺体出現傾向」『平成26年度 埋蔵文化財年報』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 注7 高橋 敦 2014 「木製品等の樹種」『小竹貝塚発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 注8 島田亮仁 2016 「小竹貝塚の古環境復元」『平成27年度 埋蔵文化財年報』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 注9 徳永重元・橋本眞紀夫 1986 「富山県南太閤山Ⅰ遺跡試料花粉分析」『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)』
- 注10 吉井亮一 1986 「富山県南太閤山Ⅰ遺跡出土の種実遺体(2)」『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)』
- 注11 能城修一・吉川昌伸 2023 「木材の樹種と堆積環境」『南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
- 注12 ブナ属については触れられていないが、ブナ属も一定量出現していることから、コナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林にはブナも混生していたと考えられる。
- 注13 渡辺正巳 2023 「微化石分析」『南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課

- 注 14 越前慎子・佐々木由香 2023 「大型植物遺体の同定」『南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
- 注 15 注 11 に同じ
- 注 16 鈴木三男 2023 「炭化材の種類」『南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
- 注 17 田中義文・馬場健司・松元美由紀・伊藤良永 2013 「貝塚の自然科学分析」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 注 18 島田 亮仁 2013 「貝塚の種実遺体同定」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 注 19 高橋 敦 2013 「樹種同定」『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 注 20 パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「上野A遺跡の自然科学分析」『富山県福岡町上野A遺跡発掘調査報告Ⅱ』福岡町教育委員会
- 注 21 注 20 に同じ
- 注 22 パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「針原西遺跡自然科学分析」『針原西遺跡発掘調査報告』富山県小杉町教育委員会
- 注 23 注 22 に同じ
- 注 24 注 22 に同じ
- 注 25 安田 喜憲 2013 「花粉分析」『小泉遺跡発掘調査報告』大門町教育委員会
- 注 26 ブナ属については、上久津呂中屋遺跡でブナの殻斗が検出され、花粉分析では上久津呂中屋遺跡でコナラ亜属と同じぐらいに高率で出現しているし、小竹貝塚、小泉遺跡、針原西遺跡、上野A遺跡でも一定量出現している。南太閤山Ⅰ遺跡ではブナの殻斗やブナ属の炭化材が検出され、花粉分析でも一定量占めている。このことは、遺跡からさほど離れていない場所に生育していたと考えるのが妥当である。
- 注 27 スギについては南太閤山Ⅰ遺跡、針原西遺跡、上野A遺跡では花粉がほとんど出現しないが、小竹貝塚で一定量が出現している。上久津呂中屋遺跡では花粉は少量であるが、埋没樹根でスギが検出されているし、刺突具や丸木舟にも使用されている。遺跡周辺では一定の範囲内で生育していた可能性が指摘できよう。
- 注 28 カヤは上久津呂中屋遺跡で埋没樹根や種子が、小竹貝塚や南太閤山Ⅰ遺跡でも種子が検出されている。
- 注 29 イヌガヤは上久津呂中屋遺跡や南太閤山Ⅰ遺跡で種子や自然木が、小竹貝塚では弓として利用されている。
- 注 30 ツバキ属は南太閤山Ⅰ遺跡で種子や自然木が、小竹貝塚で加工板が、上久津呂中屋遺跡で種子が検出されている。
- 注 31 アカガシ亜属については、南太閤山Ⅰ遺跡、針原西遺跡、上野A遺跡においては花粉分析ではほとんど出現していないが、上久津呂中屋遺跡では一定量が検出されており、幼果も検出されている。また、小竹貝塚の前期後葉～末葉にかけては、アカガシ亜属の花粉や殻斗が検出されている。このことは、さほど離れていない場所に、ある程度の個体数で分布していたことが推定される。

参考文献

- 泉 治夫 2004 『二上山のブナ林』二上山総合調査研究会
- ト部厚志 2016 「富山県・射水平野の海岸低地の形成過程と古地理の復元」『日本地質学会学術大会講演要旨』一般社団法人日本地質学会
- 大田 弘・小路登一・長井真隆 1983 『富山県植物誌』廣文堂
- 富山県生活環境部自然保護課 1980 『呉羽丘陵自然環境調査報告書』
- 藤井昭二 1982 「小泉遺跡の埋没林の意義」『小泉遺跡』大門町教育委員会
- 藤井昭二 1992 「富山平野」『アーバンクボタ 31』株式会社クボタ
- 林 昭三・島地 謙 1982 「埋没林の樹種」『小泉遺跡』大門町教育委員会

令和4年度

埋蔵文化財年報

令和5年6月30日発行

編集・発行 公益財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査課
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL (076) 442-4229
FAX (076) 433-3797

印刷 株式会社北陸製版センター
